



report KODOMO ラムサールに期待する —佐潟10ラムサールフェスティバル「鳥がつなぐ潟と人」に参加して—

大熊 孝 (NPO 法人新潟水辺の会代表世話人)

新潟市郊外の佐潟が1996年3月に国内10番目のラムサール条約湿地として登録され、その10周年記念として、涌井晴之さん(佐潟と歩む赤塚の会)を実行委員長に、新潟市・新潟日報・市民グループが協力して、表題のフェスティバルが12月2日と3日に行なわれた。この報告をしておきたい。特に、2日目のKODOMOラムサールがおもしろかった。



KODOMO ラムサールに参加した80名の子ども達

まず、1日目は新潟駅前の万代市民会館で、最初に日本野鳥の会会長の柳生博さんが基調講演をされ、兵庫県豊岡でのコウノトリの野生復帰の事例から、2年後のトキの放鳥に備え、越後平野にもトキが佐渡から餌をあさりにくることを想定しておく必要性を指摘された。

次いで、野鳥研究者の千葉晃さんと岡田成弘さんから越後平野の渡り鳥の状況、涌井晴之・藤田正・志田孝男さんから佐潟・鳥屋野潟・福島潟における市民の活動状況が報告された。

その後のパネルディスカッションでは、新潟日報編集委員の鈴木聖二さんをコーディネータに、篠田昭新潟市長とラムサールセンターの中村玲子さん、そして私がパネラーであった。篠田市長は福島潟の治水整備が進めば福島潟のラムサール湿地への登録は可能であると発言された。中村玲子さんは、10年前の佐潟のラムサール登録以降何度か来潟いただいているが、佐潟に対する地域住民の取り組みは日本におけるラムサール登録湿地の中でも出色であると発言いただいた。私は、新潟の潟は「里潟」であり、もともと地域住民との交流の中に維持されてきた自然であり、今後も人との交流が大事であることを強調し、トキの放鳥に備えて、条件の悪い水田は新潟市が積極的に買収して、湿地を復元することを提案した。

過去、佐潟に関するシンポジウムは、登録時と5年目の

2回行われてきたが、いままでは佐潟を中心に他県からの事例報告で構成されていた。今回は福島潟、鳥屋野潟、佐潟の新潟市内の3潟を連携させたことと、地元主体で実施されたことに特徴があったといえる。この参加者は300人に達し、久しぶりに万代市民会館ホールが活気づいた。

2日目は佐潟に近いウエルサンピア新潟でKODOMOラムサールを中心に開催された。KODOMOラムサールは、2008年に韓国で国際的なイベントが開かれるが、それに向けて国内では中村玲子さんが事務局を務めるラムサールセンターが地球環境基金の補助を得て主催しており、日本の33のラムサール登録湿地を4ブロックに分けて、小中学生を中心に各湿地における活動を報告してもらい、メッセージを作るという会議である。今回は3回目で関東・東北ブロックの会議であり、合計80人の子どもが集まり、付添の大人と関係者を加えると150人規模の会議となった。新潟からは赤塚・女池・葛塚小学校の子どもたちが参加し、中村大輔先生(滋賀県草津市笠縫東小学校教諭)のコーディネータのもとに他県からの小学生たちと議論し、次のようなメッセージを作った。

「湿地は命の源、みんなの宝—大事に守って次の世代につなげよう—」

これは、中村大輔先生の見事な司会があったが、基本的に子どもたちだけで作り上げたものである。

日本は明治時代以来、西欧諸国の科学技術に追いつくことを目標に、時や場所に無関係に再現可能な普遍性(哲学者・内山節はこれを場所的普遍性と呼んでいる)を追求し、変わることを成長することを良しとした教育を行ってきた。しかし、20世紀末ごろから環境問題の中でこの教育に欠陥があることは分かったが、それをどう改善したらいいのか分からなかったといえよう。それを、この子どもたちは喝破し、ローカルなことが幾世代もつながることの重要性、換言すれば、時とともに変わらない価値の存在(時間的普遍性)をうたいあげているのである。

昨今、いじめなど子どもにまつわる社会問題が多発している中、個人的には将来に絶望していたのであるが、このKODOMOラムサールに集まる子どもたちをみて、自然と触れる中でこんなにもすばらしい発想を獲得していることに感動し、未来への希望が復活してきた。

今年、全国KODOMOラムサールが国内のどこかで開かれるとのことであるが、この会議の感動を新潟の子どもたちに一人でも多く味わって欲しいと考える。これを是非新潟に誘致したいものである。

■水辺レポート

report
2006年水辺シンポジウム報告
「長野まで鮭の遡上できる信濃川・千曲川に」

● 鮭の消えた信濃川

私が長野の千曲川まで鮭が数匹しか遡上していないことを知ったのは、2年前の長野での考流会であった。私にとって鮭とは、東港線の新潟魚市場に溢れんばかりに山になった秋鮭の箱の山の記憶である。かつて仲買に居た私にとって、秋風の吹く頃になると毎朝午前4時頃から5～6kgの鮭の入った発砲スチロールの鮭の山（100箱～300箱）を移動しなければ、担当の冷凍品売場を並べる余地が無いほど鮭はごく当たり前のものであった。懇意にしていた松浜の仕出し屋さんも、毎年阿賀野川の河口に鮭網を仕掛けて鮭を獲り、宴会料理や新潟名物の「塩引き鮭」に加工し、松浜料理を味わいにくる多くの人達を魅了していた。新潟もんにとって鮭は身近な食材であり、正月料理には欠かせない魚である。



塩びきを干す風景を長野でも

2年前の信濃考流会でその鮭がかつて数万匹、長野まで遡上していたことを初めて知ると共に、近年遡上すら無い年のあることも初めて知った次第である。翌日新潟へ帰る道すがら初めて東京電力の西大滝ダム、その下流のJRの宮中ダムを見学した。そこで作られた電力は県境を越えてかなたの首都圏に送られ、JR東日本の年間使用電力量の23%をまかなう代わりにその下流では、川の水が極端に不足して水温が30度を超えること。そしてこの二つのダムにより鮭が長野まで遡上出来ないことを、大熊先生より教えて戴いた。

昨年この問題を取り上げた水辺シンポジウム「上流長野まで鮭の遡上できる信濃川に」を行い、これ

こそ新潟水辺の会が取り組むべき大きな課題のひとつであることを再確認した。

そして、今年の1月に地球環境基金ほか数財団へこの事業の助成金申請を行い、地球環境基金の審査を無事に通過した。今回の助成金申請の骨子は、流域の団体と連携を図りながら、鮭が長野まで遡上出来ない原因と思われる河川横断物や魚道等の調査、流域の住民へのアンケート調査である。

9月30日、信濃川が千曲川と名前が変わる県境の秋山郷で、第一回シンポジウムを行った。翌日は参加者とダムの現地見学会を行った。ダムから下流への流れは、大河・信濃川とは名ばかりの細い流れでしかないことを実感し、鮭の遡上が信濃川の自然再生の第一歩であると確信した。

● 2006水辺シンポジウム

「市民による環境放流へ」12月9日第二回「長野まで鮭の遡上できる信濃川・千曲川に」を、新潟市内中心部のダイヤモンドホテルの会場で行った。最初に三次元衛星画像を使った「信濃川を遡る」を見た後、信濃川の支流・渋海川に鮭が遡上している写真を撮った写真家・鈴木孝枝さんよりその時の感動溢れる写真紹介をして頂いた。シンポジウムはゲストコメンテーターに中魚沼漁協組合長の長谷川氏を迎え、長野県より長野県水辺環境保全研究会の長田氏、十日町より信濃川をよみがえらせる会の山田氏、下流新潟より新潟大学工学部河川研究室の俵山さん等をパネリストに、コーディネーターを世話人の石月氏、アドバイザー大熊代表のメンバーによるシンポジウムが行われた。

会場は予定していた80の椅子では足りない程一般市民を含めた方々が来られ、スタッフのうれしい驚きであった。住民アンケートの中間発表、近年利根川での鮭の遡上が多くなった報告、各流域の問題と課題の整理、そしてこれからの活動について2時間半があつと言う間に過ぎて行った。魚道問題もさることながら、かつての私のように信濃川の現状を知らない方々へ、信濃川中流部の水問題を知っていたく良い機会であった。

今後は市民による環境放流を通して、近い将来「新潟の塩引き鮭」のように軒先などに干した鮭を、長野の方々にも味わえるように活動を来年度もつなげて行きたい。

世話人：加藤 功

report
他門川再生研究フォーラム 2006

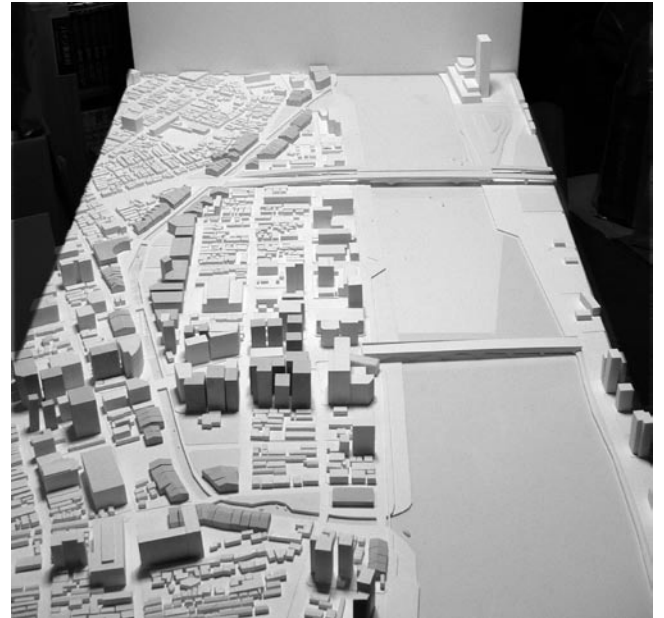
2006年水辺連続シンポジウムの第1部として“都市の中に水辺を「他門川再生研究フォーラム」が平成18年12月9日（土）午後1時～午後3時までの間、ホテルディアモント新潟を会場に開催された。これまでの他門川再生活動から市民事業の可能性を探ろうという試みである。会場には他門川周辺の1/1000の畳み一畳大の模型が持込まれ100名を超える参加者の注目を集めるなかで開催された。

ゲスト講演は遠路徳島市よりNPO法人 新町川を守る会 会長の中村秀男氏を迎え「できる人が、できる時に、できる事を」の演題で講演が行われた。徳島市新町川の清掃から水際公園の整備、フェスティバルの開催など川をいかした多彩なまちづくりを手掛けた事例が紹介され、中村さんの熱意と人柄が会場に伝わってきた。

パネルディスカッションは「他門川再生へ市民事業の可能性」がテーマである。パネリストは斎藤 力氏（他門川周辺住民代表）、篠田 昭氏（新潟市長）、上山 寛（他門川再生研究担当者）、進直一郎氏（新潟水辺の会副代表）の4氏にコーディネーターを大熊 孝氏（新潟大学教授）が務め進行した。

この中での発言は

- ①他門川は上・下流を信濃川と接続され水運や防災としての機能や魚類や水生植物などの自然再生が可能であり環境都市新潟としてのさきがけとなりえる。
- ②他門川通りは幅員32mで通行量が17,000台/日、万代橋の4万台/日の通行量の47%であり、これらは将来的に他門川上の道路が片側1車線になった場合でも充分対応できる。この場合でも近隣に流れる交通量の処理と交通ネットワークが大切である。
- ③観光的な視点から他門川添いの船着き場や賑わい空間、建築物の調和等、他門川らしい景観づくりを行う。水辺からの見え方で建築物の高さを制限する水辺斜線の導入で周辺の高層建築を制限することも可能では。
- ④他門川周辺には20の町内会、3つのコミュニ



他門川再生の夢を描いた畳一畳大の模型

ティー協議会がありこれらのコンセンサスが重要。

- ⑤堀の幅、深さ、舟を通す場合の橋の構造、高さ等。小型船舶用の堀割整備は可能。
- ⑥他門川周辺の年間行事計画の立案や市民参加の堀割の清掃・維持によって未来につないでいける。
- ⑦近隣住民の他門川再生について意見は年配の人は賛成してくれる人は多いが若い年代の人は他門川の当時の様子を知らない人が多い。

最後に大熊先生からは「川から街を見ると街は全く違って見える。街のなかに川があることの意味を再認識し他門川再生に取組みたい。」との発言があった。今後、市民活動として新たな市民公共事業を創り出していく取組みが次のステップであるとの共通認識が生まれた。篠田市長よりは「現在早川堀通りで水辺の復活を考えているが、次ぎに信濃川から入って信濃川へ出ることのできる他門川を。早川堀と他門川を最終的に考えている。」との勇気づけられる言葉があった。

上山 寛（建築家・新潟水辺の会会員）

■水辺レポート

report
04
report
05
今こそ新川リバーミュージアムを!

内野新川は186年前に農民達が掘削した悲願の川である。1737年から70年間に9回も幕府に請願したが全て却下。1820年、大河津分水より102年前に通水。掘削に165万人、その後の5次の改修までに200万人が関った「世紀の大工事」である。その結果、西蒲原2万haの湿地が干拓され美田が生まれ、周辺は水害から救われた。西川との立体交差、東洋一の排水機場等、素晴らしい歴史遺産、近代土木遺産にも拘わらず地元には記念碑だけであまりにもお粗末である。

○動機： 20年も新川を渡っている小生を含め、地元市民の多くがこの偉大な新川の遺産に殆ど無関心である。県立歴史博物館、市の歴史博物館、巻の西蒲原土地改良区にある展示パネル程度の資料を地元で展示し、まちおこしの一つにしたい。埋もれた文化遺産は街おこしの金鉱であり、七区観光の目玉となりうる。

来年度から新潟市は政令指定都市であり、今年度から新川流域農業水利事業所が排水機ポンプ改修等で12年、330億の事業を始めていること等、今こそチャンスであり、今を逃したら見込みはない。

内野新川より100年も遅く造られた大河津分水や、さらに遅い関屋分水にはそれぞれ展示資料館が現地に造られている。関係機関、自治体、NPOなどが協力し、是非実現させたい。

○現在までの状況：

「新川掘削記念館を地元で作る会（仮称）」

第1回： 8月20日

「観光立国こそ」樋木尚一郎鶴の友社長さん、

第2回： 11月4日

「内野新川の歴史を知ろう」大熊 孝先生、
現地見学を含めた勉強会。

第3回は：12月24日（日）

会名、会則等の検討を西地区公民館で実施

ここまで水辺の会の会の大熊 孝先生、加藤 功さん、
相楽 治さんには格別なご指導、ご協力を頂きました。
この場をお借りしてお礼申し上げます。

発起人、内野広通町自治会長 丸山 幸平

report
05
国際海岸クリーンアップ
& ワークショップ in 山形 2006年

国連環境計画 北太平洋地域海行動計画（NOWPAP）主催で山形県酒田市の公益研修センター（東北公益文化大学内）に開催された国際会議に出席しました。

「海岸漂着ゴミに関する活動」についてを会議のテーマに、NOWPAP 調査官、韓国から韓国海洋救助団と韓国水産開発院、中国からNOWPAP データ・情報ネットワーク地域活動センター、ロシアから海事国立大学、日本各地のNPO、山形県内の団体、酒田市の団体、酒田市役所、などなど約120名の参加がありました。

9月28日（木）快晴 まず、海岸漂着ゴミの現状を把握するため酒田港より「飛島」に向かい田下海岸の状況を視察しました。魚網、ロープ、木材、ペットボトル、プラスチックなど、その多量さに目を見張りました。日本国内からのゴミが殆んどで海外からのゴミは極少ない状況でした。午後、会場の酒田市公益研修センターに移動し日韓意見交流会に出席して、「海洋ゴミ問題解決に向けた日韓NGOからの提言」を取りまとめ参加者有志として私も賛意を表しサインをし、翌日の会議に報告されました。

9月29日（金）晴 午前、海洋ごみ問題の取り組みについての研修会が行われ、JEAN 代表・小島あずさ氏、東京海洋大学・兼廣春之氏、内閣官房構造改革特区推進室主査・福嶋慶三氏、鹿児島大学・藤枝 繁氏等による発表があり、午後は、四ヶ国によるワークショップに移りプレゼンテーション、パネルディスカッションが行われました。

9月30日（土）晴 午前、国際海岸クリーンアップ（ICC）の活動をマニュアルに基づき、酒田市宮野浦海岸（最上川河口左岸）で実地の研修を行いました。

研修後、各国代表からコメントがあり、「韓国」地球は一つ海も一つ、人類も一つ、皆で海をきれいにしましょう。「中国」活動は始まったばかりで成果はないが、ペットボトルや飲料缶はお金になるので集める人が多く、中国からゴミとして流出することは有りません。「ロシア」ICCの活動に参加し、多くの事を学んだので今後の活動に生かして行く。「日本」今後も、日本各地にICCのクリーンアップの活動を広めていく。などが表明され、以上で終了し解散となりました。

世話人 松野 直一

report 06
2006年のフランスの食育事情と水辺

フランス（以下仏と略）は、2000年の駆け足英
蘭運河ツアーでのパリ市のセヌ川遊覧、サンマル
タン運河視察以来。9月26日から1週間、仏北部
パリ市から西海岸のロワール川河口ナント市、そ
の上流ツール市と仏新幹線TGVでの教育ファ
ーム取材の旅。食育の現場、教育ファームは郊外な
のでひたすら歩く時間も多く足裏に仏国の郊外や
街まちの景色が焼きついた旅でした。



ナント市郊外の教育ファーム

仏人は「農業国フランス」を自慢します。その気
質を醸成させる教育ファームは、全土に官営、農
家営合せて1200箇所以上あります。幼児から高校
生まで4人に1人は年1回訪れると言います。食
育・農育が浸透している証左でしょうか。1990年
代に仏国で始まった味覚教育も盛んに授業に取り
入れられています。ヨーロッパでもわが国と同様
に近代化による農家の激減で都市と農村の距離が
遠ざかり、食の源の「農」が見えにくくなってい
ることへの危機感があると言います。紙面が無い
ので最も感じたことを2点述べます。

農家の方に、なぜ教育ファームを始めたのかを
たずねた。総合学習に地域の方々が支援している
日本のようにボランティア活動もしたがそれだと
子どもたちは横を向いて聞いてくれない。有料で
始めたところ真面目に聞くようになった。指導者
は農家の女性が主体だが、彼女たちは真剣に農業
の現場と近代農業の現実を伝えるように教育技術
を磨き、結果農業収入の20%を得るようになって



1リットルに5ccの砂糖、塩、レモン汁などで4味テスト。
終講義は町の一流レストランで食事とか。

いる。中には助手を雇用している農家もあった。
対して、国立、県立、市立の教育ファームは、指
導者の力はあるが農業の現実を伝えるまでになっ
ていない。両者の利点を統合した手法と新潟独自
の手法を開発すべきと感じて帰国した。



ロワール川の船着き場

セヌ川周辺の水辺は、相変わらず世界中から
の旅人で賑わっていた。ロワール川では船の姿も
あまり見られず、全土に張りめぐらされた運河の
一部でも見れたらと思ったのだが。もう一度が
あれば、そのときは最後だろうから是非夫婦で
ワイン付の運河の船旅をしてみたいものだ、と
思った。

世話人 相楽 治

まきわりき 自動薪割機を知っていますか？

寒い冬になりました。ストーブやコタツで暖を取られていると思いますが、水辺の会の事務局の「みずき野ハウス」では薪ストーブが使われています。今回は、そのストーブにまつわる話を報告します。



薪割を手伝ってくれた鎌田謙さんと尚美さん（2006年11月）

ストーブは時計型ストーブと呼ばれるもので、今使っているのは5000円弱で購入したものです。鉄板がうすく、2年ぐらい使うとぼろぼろになるのですが、20年使っても5万円ぐらいで、北欧型のストーブより圧倒的な安さなので、これで十分かと思っています。

煙突はススがたまりやすく、掃除が大変です。2006年の春は、みずき野ハウスを建てた旗野秀人さんに手伝ってもらってススを取りました。煙突を二重にするとススがたまらず掃除がいらなそうですが、その二重化に20万円以上かかるとのことです、当分スス掃除をしていこうかと考えています。スス掃除の時は、身の軽い方にお手伝いいただけると幸いです。

ところで、薪はどうしているかということですが、1年目、2年目は、旗野さんや畠山種苗さんが運んできてくれた材木の切れ端や樹木屑で十分間に合いました。それはまだ少し

残っていますが、今年は、ウッディ阿賀の香田和夫さん（水辺の会会員でもある）と浅井敬一さん（水辺の会会員）が駆除したニセアカシヤの丸太を運んでくれました。ニセアカシヤは火持ちがいいので薪としては大変良いのですが、これが堅くて割るのに大変でした。実は、私が薪割中に斧の柄が折れて、右手を打撲して、2ヶ月ほど痛みが残りました。そこで、これは手で割るのは無理だと思い、自動薪割機を購入しました。自動薪割機については群馬県上野村に住む哲学者・内山節さんからも威力を聞いていたのですが、彼のものは外国製とのことでした。私は、インターネットで調べた後、香田さんに相談して、亀田にあるホームセンタームサシで推力7トンの油圧の国産品を求めました。写真の長方形の物体がその自動薪割機です。これは約6万円しましたが、確かに強力です。しかし長さ50cm程度以下の薪しか装着できませんので、チェーンソーで短くする必要があります。

薪割は、自動とはいえそれなりに体力を使いますが、仕事を終えた後、なんとなく充実感があります。薪を積んだ山を見ると、これで今年の冬は安心だと豊かな気持ちになり、労働の楽しさが実感されるからだと思います。私のように、口先だけで「稼ぎ」をしている人間は、たまには肉体労働が必要不可欠だと感じました。

大熊 孝

report 富山レポートその2

富山市現地駐在員の和田です。前回のレポートから少し間が空きましたが富山レポート第2弾を送ります。

LRT（富山ライトレール）

富山ライトレールは順調に営業を続けています。去る平成18年11月9日に、4月29日の開業以来100万人の乗客数を突破しました。これまでの日平均の乗客数は5,200人を数え、当初の目標であった乗客数3,400人を上回り、中間決算では当初赤字が予想されていたのですが、何と2,600万円の経常利益をあげています。

また、ライトレールは日本鉄道賞、グッドデザイン賞（金賞）、バリアフリー優秀大賞など、6つの賞を受賞、そのせいか自治体関係者などの視察者も2,000人を超え、今のところは当局が当初考えていた以上の展開になっています。

富山ライトレールは、平成18年4月29日に国内では初の本格的なLRTとして営業を開始しました。経営主体は富山ライトレール（株）（3セク、社長は森富山市長）。営業路線は廃線になったJR富山港線の路線を引き継いで、新たに軌道1.1kmを敷いたもので、富山駅北口から岩瀬浜まで約全長7.6kmです。総工費58億円。

森富山市長はこれまでの成功のポイントを、連続立体交差事業からの負担金による財源に恵まれたことや、新幹線整備のタイムリミット等々があるが、「街づくり」の一環として取り組んだことがこれまでの成功の最大の要因ではないかと語っています。市長はライトレール事業を決断したときは、駅の連続立体交差事業の事業化を検討する際、JR線の高架化、廃線にして代替バス化、LRT化の3つの選択を迫られた時、迷わずLRT化を選択したと言っています。

地方では、運賃収入だけでは初期の建設費がまかなえないため、公設民営の考え方が必要と判断、初期コストはすべて公的負担で整備を決断、市民には将来の街のあり方として、車がなくても生活出来る街づくりを訴え、市民の理解を得たと語っています。富山は1世帯あたりの車保有台数が1.73台で全国第2位と、日本の中でも車社会の土地柄ですから、市長の話から市民も将来的には脱車社会を切望していると理解すればいいでしょうか。

市民が受ける便益については、単に市民の足が増えて便利になるということだけではなく、LRTのインパ

クトによって中長期的に沿線地域のステータスが向上し、居住人口が増加するなどのコンパクトシティ化が進むことによって、結果として行政コストが低減することや排ガス低下による環境負荷の軽減などによる便益が、初期の建設コストを上回ると考えているようです。



富山駅北地区の再生のきっかけとして期待が高まる

これまで、公共交通は利用者の減少からサービスレベルが低下し、更に利用者の減少を招く、負のスパイラル現象が起きることが多かったのですが、思い切った利便性向上でこの連鎖を断ち切る大きな社会実験とも言える試みであったとも言っています。

しかし、課題もあります。これまでの利用者の傾向は平日より休日が多く、平日でも定期券以外の利用者が多い傾向です。今のところ日常の通勤の足として使っている人の割合が少ないと考えられ、一時的なブームによるものかそれとも市民が支持しているのかどうかはこれからの推移によると思います。

沿線住民が来春にむけてチューリップを線路脇に植えたことがニュースになるなど、いまのところ良い方向での連鎖が起きて上昇スパイラル反応が起きつつあります。これが一時的なのか、それとも更なる上昇に転じていくのか、少し時間をかけて見守っていく必要があります。富山LRTの奇跡が起こって各地に波及してほしい希望はあります。

「越中おわら」についても、今回レポートする予定でしたが紙面がつかまりましたので次回にします。ではまた。

世話人 和田 日朗

2007年 開港5都市景観まちづくり会議・新潟大会 実行委員募集!

約150年前に世界に開かれた港の仲間達が新潟に集まります。

本会議は、安政5年、開港港に指定された函館・横浜・神戸・長崎および新潟の5都市の市民団体等が、それぞれのもちで開港都市としての歴史や文化を尊重し、身近なまちなみの形成やまちづくりに取り組む活動について、互いに交流を図るため、平成5年夏神戸市で始まりました。



新潟開催は3回目となります。1回目は平成8年冬2月に開かれ、厳冬の体験。また2回目は平成13年夏8月に開催、あっちは夏の新潟の大自然の中で育てられた大らかな新潟人の『おもてなし』を感じていただきました。毎年各都市をめぐり、去年9月には長崎大会が開催され、今年は新潟に大会旗がやってきます。

田園都市構想、食と花の政令指定都市。今年は、平成の大合併により80万都市となった新潟市は政

令指定都市となり、一躍大都市の仲間入りをします。新潟らしさを各都市にアピールし、先輩政令指定都市(横浜市356万人、神戸市152万人)の意見も聞きながら会議を開催したいと考えています。

これから開催実行委員会を立ち上げながら、大会に備えます。新潟水辺の会も実行委員として参加しています。ぜひ、市民団体の方々、市民の方々の汗により、素晴らしい会を演出したいと考えていますので実行委員としてのご参加をお願いします。

大会事務局長 森本 利

大会スケジュール

平成19年11月9日(金) 朱鷺メッセ
全体会議、ウェルカムパーティー
10日(土) 分科会、オプションツアー
11日(日) 全体会議

問い合わせ先

新潟市街づくり推進課
〒951-8550 新潟市学校町通1-602-1
TEL 025-228-1000 (内線32810)
FAX 025-229-5190

入 会 案 内

この会は、遊び半分・真面目半分で活動しています。ウォッチングには、家族ぐるみで子ども達も一緒に参加したりしています。自分の足で水辺を歩くなりして、自分でも感じたことから、自分の水辺を発見していく、あるいは考えていくことを大切にしています。

今までとは違った視点から、あらためて自分の身の回りに目を向けて見ると、同じものを見ているのに今までとは違うものに見えてきます。新しい発見があります。自分の世界もまた少し広がってきます。

この会も色々な分野の人達が集まって、それぞれの世界がもっと広がっていくような出会いの場を提供できる会にしたいと考えています。あなたの参加お待ちしております。

■設立年:1987年10月15日 ■目的:水辺に関わる自然、歴史、文化、生活、風俗、スポーツ、レクリエーション並びに科学技術を探り、これからの水辺の望ましい姿を考え、地域の生活向上に寄与することを目的とする。 ■代表者:代表 大熊 孝(新潟大学工学部教授) ■会員数:個人211名・法人16団体(2006年12月現在) ■活動:水辺シンポジウムの開催/水辺ウォッチング/会報「新潟の水辺だより」の発行/水辺環境整備に関する学習会/長野県富山県の水辺グループとの交流会/通船川、佐潟の調査・研究 etc. ■年会費:個人会員一口1,000円を2口以上、賛助会員(法人など)一口5,000円を2口以上

入会申込書

年 月

フリガナ氏名		男・女
		歳
特技や水辺への想い		メールアドレス
住所	〒 () -	
職業		
勤務先	〒 () -	

注)紙面の都合上、縮小しています。
250%程度拡大コピーをしてご使用下さい。

●事務局からのお願い

インターネットメールで随時会員の皆さんに情報をお届けしています。メールアドレスを新しく持った方、アドレスを変更された方は事務局まで御一報ください。

●発行:特定非営利活動法人 新潟水辺の会

●事務局:〒950-2264新潟市みずき野4-7-15

大熊 孝 方

Phone 025-264-3191

F a x 025-264-3260

ホームページ

<http://www17.plala.or.jp/mizubenokai/>

メール mizubenokai@plum.plala.or.jp